

生命と倫理 8回目

パーソン論



新型コロナウィルス パンデミック

緊急事態宣言!!

マスクが5倍の価格!
アルコール製品 8倍の価格!
トイレットペーパー在庫切れ

商品が高騰して製造や小売が増えて社会全体がまとまっていくならいいんじゃないかな

価格なんて市場が決めるものなんだから消費者がとやかく言ってもコントロールできないでしょ

はあ ~?! そんなボッタクリ商売 道徳的におかしいだろ !!

正義についての3つの考え方

功利主義 (最大幸福主義)

リベタリアニズム (自由至上主義)


美徳の促進

功利主義について

行為や制度の社会的な望ましさは、その結果として生じる功利、有用性によって決定されるとする帰結主義の1つの考え方である。

倫理学における思考実験 ⇒ カルネアテスの板問題 トロッコ問題 救命ボート問題



カルネアデスは、古代ギリシアの哲学者。カルネアデスの板という問題を出したことで有名である。

彼はキュシネで生まれ、アテナイのアカデメイアで哲学を学んだ。そしてアカデメイアの学頭となり、急進的な懐疑主義の立場からストア学派を攻撃した。著作はないが、弟子のクシイトマコスなどによって伝えられている。

生年：紀元前214年
死亡：紀元前129年、
時代：ヘレニズム哲学
地域：西洋哲学
学校：Academic skepticism、プラトニズム

カルネアテスの板問題



紀元前2世紀のギリシア。一隻の船が難破し、乗組員は全員海に投げ出された。
 一人の男が命からがら、壊れた船の板切れにすがりついた。するとそこへもう一人、
 同じ板につかまろうとする男が現れた。
 二人がつかまれば沈んでしまうと考えた男は、その男を蹴飛ばして殺してしまった。

フィリッパ・ルース・フット

(1920年10月3日-2010年10月3日)



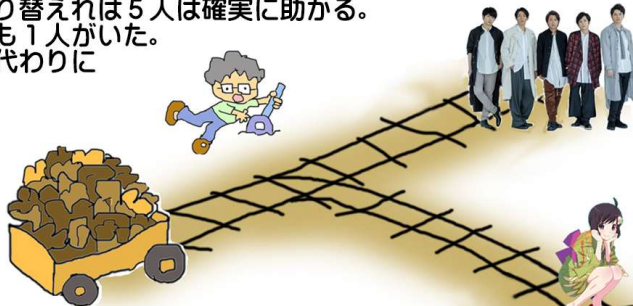
イギリスの哲学者。倫理学分野の業績で著名。

アリストテレスの倫理学が、より新しい義務論や功利主義の倫理学説に対抗できるほど現代社会の問題に適応可能であることを示した。

帰結主義への批判により分析哲学の内に規範倫理学を再び打ち立てようとした研究も非常に重要で、彼女が提起した「トロッコ問題」については今も議論が続けられている。

トロッコ問題

線路を猛スピードで走っていたトロッコの制御が不能になった。
 このままでは前方にいる5人が轢き殺されてしまう。
 この時たまたま、あなたは線路の分岐器のすぐ側にいる。
 トロッコの進路を切り替えれば5人は確実に助かる。
 しかしその別路線でも1人がいた。
 切り替えれば5人の代わりに1人が確実に死ぬ。
 あなたはトロッコを別路線に引き込むべきか？



救命ボートの問題



ギャレット・ハーティンが1974年に提案した資源分配の比喩である。

物理的に60人が乗れる救命ボートに、すでに50人が乗っている。海には投げ出された人が99人いる。この場合、救命ボートがとりうる選択肢は4パターンある。

- できるだけ乗せて、ボートは沈没する。
- 10人だけ乗せる。
- 自己犠牲の人がボートから降りて、できるだけ多く助ける。
- 安全係数を考えて、無理に人を乗せず、そのまま避難する。

救命ボート問題の解説



地球環境の悪化における**南北問題**についての**対応を比喻**した問題。

救命ボートに乗っている人は**先進国**、海に投げ出されている人を**途上国**にたとえて、環境問題の解決のためには、南北問題を見過ごすことは仕方がないことだと考えていた。

彼は「安全係数を考えて無理に人を乗せず、全員見殺しにする」という選択をしていた。

子どもが、浅い池で溺れている。
周囲には自分しかいない状況である。

池の深さはヒザ程度、池に入って引き上げれば簡単に子どもは助けられることができる。

しかし、もし助ければ、昨日買った新しい靴とズボンがダメになってしまう。

わたしは
どうするべきか…



もちろん、助けるべきである！

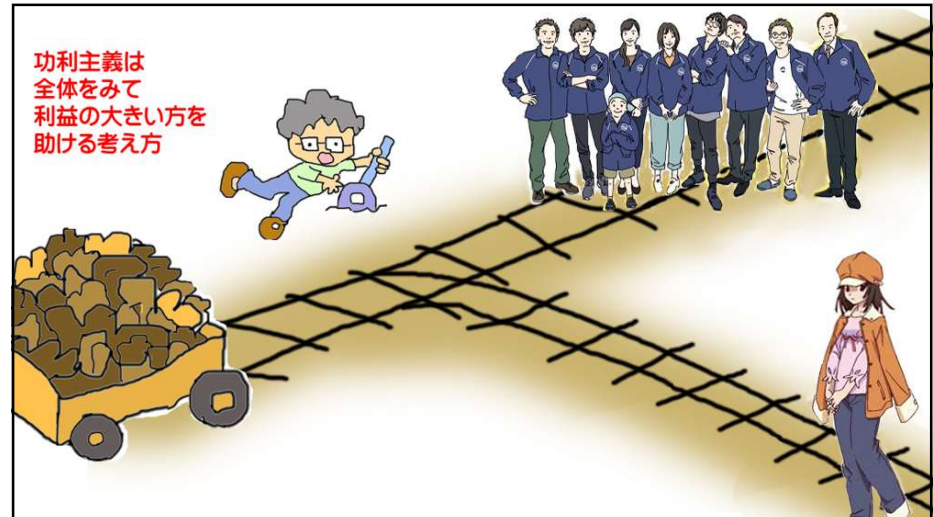
この状況において、子どもを助けても助けなくてもいいのではなく、助けなかったら**功利主義的に悪いことになる**のである。

この道徳的判断の背後には、次のような原理が存在する。

非常に悪い事態を防ぐことが、その事態と同程度の道徳的に重要なモノを犠牲にしなくて済むのなら、その事態を防ぐべきである。

功利主義は、子どもの死という非常に悪い事態を、新品の靴とズボンという小さな犠牲によって防ぐことができる判断なのである。

功利主義は
全体をみて
利益の大きい方を
助ける考え方



功利主義の哲学

人工妊娠中絶や安楽死といった
デリケートな現実の問題について
実践的で積極的な主張を展開する

人間とは

生物学的には、**ホモ・サピエンス**
という種の構成員であり、
人格的には、**理性的で自己意識を**
有する者という2つの意味をもつ
存在である

パーソン論とは

人格を持つ存在に価値があるのなら
人格を持たない生物は
殺しても道徳的に許されるはずである

自己意識が劣る生物ほど
価値がないのなら
こういった存在から
先に殺してもいいのではないだろうか



マイケル・トゥーリー

米国の功利主義の学者 (1941-)
コロラド大学教授

「**嬰兒は人格を持つか** (1972)」という
論文において、独自の生命倫理論を展開し、人工妊娠中絶も新生児の殺害も道徳的に許されると考えた。

「**理性的で自己意識のある存在**」を**パーソン**と称し、生存する権利を有する存在と考え、パーソンを有していない胎児・新生児・臓器生産用のクローン人間等は殺害しても道徳的に許されると考えた。



パーソン論は「**人間との境界に人格・知性を用いる合理的生命倫理学**」といえる。

この考え方では、例え生物学上は人間であっても、人格や知性を持たない新生児や嬰兒、臓器培養目的のクローン人間や、脳死の人などは人間として認識されない。

宗教や社会的規範などの要因でヒトクローンによる臓器培養や人工妊娠中絶が制約される中で、これら古い概念に代わって現代の科学者達の間で浸透している非常に理論的な考え方といえる。



ピーター・シンガー

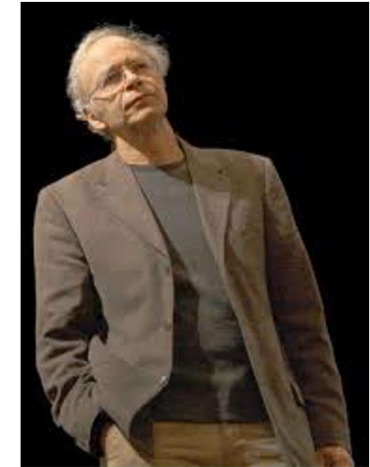
プリンストン大学教授。
専門は応用倫理学。
功利主義の立場から倫理問題を探求。

著書『**動物の解放**』は、動物の権利や
肉食主義の思想的根拠として、広く活
用されている。

ザ・ニューヨーカー誌「最も影響力のある現代の哲学者」と呼ばれ、
2005年にタイム誌「**世界の最も影響力のある100人**」の一人に選ばれた。
両親は第二次世界大戦の前にウィーンから移住したユダヤ人で、母は医者、父は茶やコーヒーの輸入を営む。

「ある存在が苦しみを感じる
可能性がある限り、その苦し
みを考慮しないことは道徳的
に正当化できない」

と彼は主張する。



ピーター・シンガーの動物解放論・動物権利論は、動物の利益に人間の利益と同様の重みを与えるという点で、**従来**
の動物愛護運動と一線を画する。

動物愛護運動はあくまでも**人間の利益を優先した上で、動物の利益にも「そこそこの」配慮をしまし**ようという立場であったのだが、シンガーが誤解を招きがちな人物でもあるので整理しておいてほしい。

シンガーは種差別に反対する功利主義者である。
関係者の利益を最大限に促し、不利益を最小限にするような行為が**シンガー流の功利主義**である。

**動物が持っている唯一の権利は
平等な思いやりを受ける権利である。**

